

第3学年社会科における「意味と内容」のひろがり

3年A組 山崎 立也

1 子どもに対するねがいと学習指導のねらい

(1) 単元目標

単元名: わが町のはたらく人

- 働く人には思いや願いがあることに気付かせ、自分も社会の一員であるという自覚を持たせる。
- ・働く人の思いやその仕事の様子に関心をもち、進んで調べようとする。
- ・働く人の願いや社会への働きかけを自分のことと結びつけて考えることができる。
- ・工場見学や働く人へのインタビューから、働く人々の願いなどを調べ、まとめることができる。
- ・働く人の工夫や努力を具体的に理解することができる。

(2) 単元設定の理由

3年生の社会科では、身近な地域(市・町・村)を取り上げ、その地域の特性やその地域に住む人のより良く生きようと社会に働きかけていく様に触れ、未来社会の形成者としての素養を会得していくことにある。

本単元では、市内にあるパン屋さんの主人(以下、山本さん)を取り上げた。パン屋さんの側からすれば、今、特に工夫しているということではなくて、パンづくりをはじめから今までの間に培ってきたノウハウをもとに、今なおパンづくりを研究しながら仕事に従事しているということである。

またこのパン屋さんは、本校の給食用のパンを焼いてくれており、子どもたちにとっては、身近な存在である。しかし、子どもたちにとっては、パンそのものは身近であっても、作っている人との接点はほとんどない。しかし、一般的なパンを取り上げるよりも、子どもにとって意味がある。給食で食べているパンということで、子どもたちには、五感を通してそのパンについての思いがある。また、クラスみんながそれを共有しており、ものに対して共通して認識できている。

しかし、社会科の学習において、パンそれ自体を学習対象としても意味がない。そのパンを通して見える人の営みを見て、感じて、考えることが大切である。

このパン屋さんは、個人経営をされており、製造・配達などほとんど自分でされていて、本校にも自ら配達してくれている。パンを作るだけでなく、このパン屋さんを見ていく中で、子どもたちが



いろいろな疑問を持って学習を進めていけそうだと考えた。

(3)子どもに対するねがい

子どもたちが、学習の題材として取り上げた人やものに触れ考えたことを、自分の中に取り込んでいってほしいということである。

つまり、子どもたちの目の前にあるモノ(社会の仕組みも含めて)には、それを作った、また使っている人の願いや思いがあることを知り、それを意識してほしい。直接学習対象となったモノはもちろんのことであるが、例えば、給食以外のパンは、パン屋さんでなく八百屋さんは、などというように、その地域社会にいる他の仕事に従事する人に対しても、関心を持って見ていけるような子どもに将来に渡ってなってほしい。

また、学習の形として、学校でしかできない集団学習(一斉学習)を大切にし、真剣な場であってほしい。そのために、個々人が自分の考えをしっかりと作っていくことが大切である。これがあることによって、みんなの中に入っていくことができ、その子の居場所を作っていくことができる。どの子どもも学級を準拠集団と考えられるようになってほしい。

2 3年生の子どもがとらえた「意味と内容」

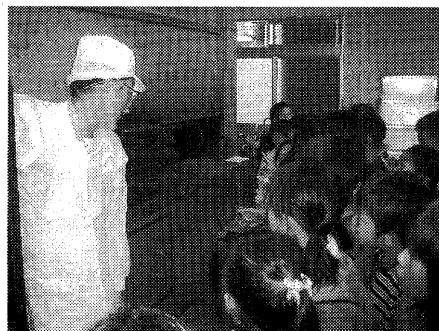
第1次…パンはどのように作られるのだろう。

ここは本単元の導入の部分である。まず、学習をはじめの前に、パンはどのようにして作られるかを子どもたちに調べさせた。本やインターネットで調べる子ども、親など似聞いた子ども、自分で作った経験からやテレビとかで見た記憶から考えた子どもなど、いろいろな手段で調べてくることになった。共通しているものもあるが、違いも多少ある。しかし、パンはどのようにして作られるかということが認識できた。しかし、山本さんが作っているのは給食のパンである。本校が1日の給食で必要なパンの数は、750個余りであり、この数のパンを作るためには、自分たちが調べてきたことでは、説明しきれないため、山本さんのパンづくりを考えていくことに方向付けた。

第1次は、対象と子どもが出会う場面である。ここでは、パンというものに目を向けるということから始まり、対象となる人のパンづくりに子どもたちの視点を共通なものにしていった。

第2次…山本さんのパンづくり

山本さんは、多くのパンをどのようにして作っているのだろうか。たくさん作るためには、大きな機械があったり、それらが連動していたり、たくさんの人が働いているのではないだろうか等と予想した。それを確かめるために見学することになった。山本さんのお店兼工場を見学するのは、子どもたちは、自分たちが予想したことを検証することが、大きな目的だったが、見学先の様子自分たちの予想が違ったのと、山本さん本人と出会ったことから、子ども達の中には、パン直接よりも山本さんに目を向けていく子どもが多くなってきた。



子どもたちは、自分たちの予想とのズレを「どうして山本さんは…」というように対象が人に変わってきている

子どもたちは、見学を終えて疑問に思ったことやもう少し追求してみたいことを自らで複数作った。この中から、集団としてみんなで考えていくにふさわしいものと個人で追求するものに分けていった。

子どもたちにとって、「集団で追求していくのにふさわしいかどうか」という言葉は難しい。子どもたちにとっては、多くの仲間が疑問に思っていること、自分の考えたことをみんなに聞いてもらい、他の人はどう考えているか知りたいというものであった。

この後、自分たちの想像を超えた中で仕事をしている山本さんはすごいということになった。このことは、大きなくくりではあるが、子どもたちの疑問の多くと関連することができた。

3「意味と内容」がひろがる場面

研究会本時では、山本さんのすごさについて考えた。

山本さんのすごさとは何だろうか。前時は見学したことを手がかりに自分なりの「すごさ」を作る。(家庭学習)このことを前提として全体の場に持ち寄った。

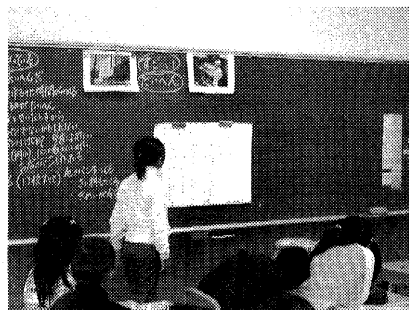
この時、子どもたちの様々な角度から見たものが出るようにしたいと考えた(全体学習)。

子どもたちが感じ取った山本さんのすごさを大きく2つに分けると、仕事の内容そのものと、山本さんという人そのものになった。もちろん仕事をしているのは山本さんであるから、分けるものではなく、仕事の内容も含めた総体としてあるのが山本さんであり、仕事の内容から入っていても、山本さんという人に返っていくことになる。子どもの関心の向いているところから学習に入ることにした。

子ども達の中には、見学の時、山本さんが作っている給食のパンが、本校だけでなく、他に12校あることを知った。このことが、山本さんのすごいところであると結びつけている。これは、はじめに本校の給食用パンが、1日750個余りということと結びついているのである。

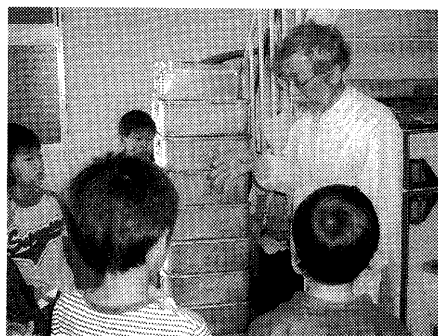
反面、それほどでもないのではという子どももいた。この子どもは、和歌山市内の小学校の数が本校を入れて53校あるという事実から比較すると、それほどでもないのではということであった。どちらも比較の上で考えているが、その比較の基準が違い、話し合っても相容れ合うことはない。まず、山本さんの仕事の中身を明らかにすることである。

13校を調べてきた子どもの中には、学校名を調べている子どもがいて、それを手がかりに、パンがどれだけの個数必要になるのかを考えていった。具体的に山本さんの仕事の中身を明らかにしていこうとした。しかし、山本さんの仕事はそれだけでなく、出来上がったパンを配達する仕事もある。その上、山本さんの1日を調べている子どもから、給食のパンの仕事は午前中に終わってしまうという指摘があり、時間との関係も考え合わす必要も出てきた。



オーブンで1回に焼けるパンの個数と焼き上がる時間、これをもとに必要な個数を焼き上げる時間、そのパンを配達する時間などを考え合わせていくことをした。そんな中で、より具体的に山本さんの仕事が見えてきた。はじめは、仕事の内容と山本さんの人となりに分かれていた子ども

たちであったが、お互いが関連しあってきた。山本さんの1日を調べている子どもは、起きる時間も調べていたが、はじめは朝4時に起きて仕事をするということが、単に早起きでたいへんだというレベルでなく、朝4時に起きて仕事を始める必然性が明らかになってきた。



また、見学の際に勉強部屋のような所を見つけてきた子どもがいた。その子どもも、山本さんの午後の仕事を考えていく中で、他の子どもが、山本さんはフランス語のパンやお菓子作りの本も読めるということ今でも勉強しているという話を聞いてきた。これを聞いて自分が見たことがつながった。

実際に起こっていることを具体的に明らかにすることで、見学を通して自分が見たものや考えたことや疑問を明らかにしたり、意味づけしたりすることができた。そうすることによって、つながってくるものがあったり、さらに考えていく必要があたりするものが見えてきた。

4 成果と課題

子どもが自ら学習を進めていく原動力となるのは、課題について「わかる」という達成感が生まれた時、また、所属する集団の中に自分の位置を感じたときであろう。

課題に向かう子どもたちは、今回の学習で、見学を通して見たり聞いたりしたことを、単にすごいと思うような表面的なものではなく、より具体的に明らかにしていくことで、自分に見えていたものをより現実的に捉え直すことができたと考える。そこには、「どうしてだろう」「なぜだろう」という思いを常に対象に向けていくことでできていからではないだろうか。

また、一見、個々が抱いた疑問ではあったが、集団で話を進めていくことで結びついていった。表面的なものだけでは、それに触れた者の感じ方の違いに左右されることが大きく、例えば、今回のように給食で必要なパンの数、それを仕上げていくための手間を考えていくことで作業に必要な時間が割り出されてくる。このような客観的な事実がなければ、いくら集団で話し合いをしても、子どもたちの意見がかみ合うこと深まることもなく、平行なままであったであろう。そういう意味でも、客観的事実を明らかにしていくことが大切になってくる。

今回、教師として、子ども個々の考えている方向などを見取りながら学習を進めてきた。子どもたちが考えていることを共有(まなざしの共有)しているからこそ、子ども個人や子ども集団の向かおうとする方向を指し示すことができるのではないだろうか。その行為そのものが、学習支援であろう。

次に子ども同士のまなざしの共有の問題である。これには、まず集団に所属するすべての人やものを尊重する雰囲気というものが、学級に成立していることが大切である。その雰囲気(学級風土)の中で、集団の中に自らを位置づけていけるためには、集団の課題に対して、自分の考えをしっかりと持つことが必要条件となる。そのためにも、「ひとり学習」を真剣で具体的なものにしていく必要性を感じた。